



「花咲くチエスメ (トルコ)」1980年 60号S



「イスタンブールの朝焼け」2016年 20号F



「花のコーラス」1996年 30号F



「雲南シンボー族まつりの日」2015年 200号P

## PREVIEW 百寿記念 入江一子 自選展

世界の果てまで見てみたい  
——シルクロードに捧ぐ

武田厚

シルクロードを描く、という仕事がライフワークのように印象づけられるのが今年100歳を迎える洋画家の入江一子である。大方のシルクロード作品は200号という大作で、女流画家協会展や独立展の壁を飾り、度々の個展においても絶えず発表されてきた。そのエネルギーの持続性については常識を超えているといえるものであり、その熱情の純正さや発露のあり方においても飛びぬけて希少な画家のように見受けられる。

70年を優に超える画業の内の過半の年月をかけて積み上げてきたシルクロードという主題とのかけがえのない心の交流は、多分画家自身の生きていく指標のようなものをより明確化し、その意義の深さや豊かさとなることができるための大きな栄養素となったであろう。結果として

描かれてきた作品の数々は、画家の日々の暮らしの証としての記録でもあり、そのシルクロードと通わせたい心の交流の形でもある、と理解するのが自然のよさに思う。

作風は極めて鮮やかな色彩のものが多く、その色調のユニークさもよく知られるところだ。また、造形的に見れば、師であった林武の調示の影響もあつてか、明快で力のある形と構成が一貫していて、まさに不惑で責任のある画面を作り上げている、と私は常々思っている。とりわけその構成に見る特異性については、天真的なもの、としかいえないほどの爽やかな爛漫性、という資質を生ずることなく今も保っているところが興味深い。

入江一子は、シルクロードゆかりの国々をこれまで数々訪ねてきた。東西のアジアやヨーロッパなどの領域も広い。そうして訪ねた国々、町々、村々の人々と暮らしの中で知り得た様々な風物、風土、文化が、いかに在していたとも思われる。シルクロードという大きな時空へと誘われる要因やきっかけは様々あつたようだが、そのスケールの大きさをものともせず、に絵画という自らの心身に取り込んだできたのも、やはり大陸育ち故なのだろうか、と思つたりもする。

100歳記念の自選展である。驚きである。入江一子がどんな自分を選ぶのか興味津々。

(たけだ・あつし/美術評論家)

### 【東京展】

10月26日(水)~11月1日(土)

日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊

中央区日本橋室町1-4-1

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331

03(3)26241331